

随想 時の流れ

「時間は生物の種によって異なる重みを持つ…?!」

（株）P P Q C 研究所 加藤 宏光

《二年が地球の二日半という短さのスーパーアース、三六光年先に見つかる》というインターネット記事を見つけた（soraeer宇宙へのポータルサイト、二〇二二年四月十九日）。いわく、「カナリア天体物理学研究所の Borja Tolendo Padron 氏らの研究グループは、およそ三六光年先にある恒星『グリーゼ740』（GJ740）を周回する系外惑星『グリーゼ740b』を発見したという研究結果を発表しました。

グリーゼ740は直径と質量がどちらも太陽の半分ほどの赤色矮星（表面温度は摂氏約三、六〇〇度C）で、「へび座」の方向にあります。その周囲を公転する系外惑星グリーゼ740b

は、最少質量が地球の約三倍のスーパーアース（大型の地球型惑星）と見られています。地球型の岩石惑星はその環境も気になるところですが、研究グループによるとグリーゼ740bは主星であるグリーゼ740から約〇・〇二九天文単位（地球から太陽までの距離の約三%）しか離れておらず、公転周期（つまりグリーゼ740bにとつての「一年」）は約二・四日という短さ。主星に近いためグリーゼ740b表面の平衡温度は摂氏約五五〇度Cと算出されています（以下略）。

重さの主星を二・四日で回り続ける惑星という記述に目を引かれた。時間とは、いかにも不思議なモノ（モノなのであろうか?!）である、とは著者がかねてから実感していた。何かの記事で読んだことがあるが、太陽を周回する惑星、われわれがよく知る《水、金、地、火、木、土、天、冥海》（著者の理科で学んだ時点で海王星が太陽に近く、冥王星がその外側を周回していた）以外に、五、〇〇〇年の周期で周回する軌道の惑星があるという。正確に書名を覚えていないが、伍島某という著者であったと思う。五、〇〇〇年に一度その惑星が地球に近い軌道を通るとき、地球にはカタストロフィー

たどり始めたとの設定でも、大晦日の午後三時半ころにスタートしたことになる。現代人（ホモ・サピエンス）がネアンデルタール人との競り合いに勝者として勝ち残り、知的生物として活発に活動を始めたのが六万年前といわれる。ホモ・サピエンスを例にとれば、十二月三十一日の午後十一時五十分ころであるから、地球規模で考えれば現代人の歴史は一〇分に届くかどうかのレベルとなる。地球にとつてみれば、現代人がかき乱している自然破壊等、「ちよつと失敗作ができちゃった」程度の出来事なのだろう。

キタダ当りに換算すれば同量の餌を食べて生涯を終える（らしい）。ネズミは僅か四日で自分の体重と同じ重さの食物を食べ、ゾウは自重分の資料を一か月以上もかけて摂取する。活動するエネルギー量も同じである。また、心臓は両者共、一五億回ほど鼓動すると止まる、という。ネズミの寿命は長くとも二〜三年であり、ゾウは六五〜八〇年ほど生きる。つまり、ネズミの心臓はゾウの二五倍ほど早く鼓動しているのである。そして、ネズミはゾウの一／二五の期間しか生きられない。時間というモノは、生きている生物種によって判定基準を変えて理解すべき相対的なものである。

本の存在がなくなること、親も姉や弟の存在もなくなること、それなら、今生きているというものは何なのだろうか?! 漠然とそうした思いに駆られると、何かしら恐ろしい恐怖感に迫られ居たたまれない気分がしたことを思い出す（このような恐怖感は一〇歳ころまで心の奥にあったように思う）。

て、人間が人間である自分を見つめ納得するために考え出しているだけのことである。ネズミの時間とゾウの時間の物語には、その時を彷彿とさせる感があり、改めて《時間》の持つ意義を考えさせられる。一、〇〇〇年を経てもまだ隆々と命を長らえている楠木も、今年花を咲かせ実を結びそして枯れてゆく草花も、二〜三年の寿命で次世代へ時を繋ぐネズミも八〇年の年月を生き抜くゾウもすべて自分の持つ時間を単位として命の鎖を繋ぐ宿命を生きている、そんな思いが先のインターネット情報でふと頭に浮かんだ。

しばらく前に読んだ書物で面白かったのは《ゾウの時間ネズミの時間》というモノであった（動物生理学者、本川達雄著、一九九二年、中央公論新社）。内容をまとめると次のようになる。

哺乳動物について、一キタダ当りの体重で比較すると一生の間に食べる食物の総量は同じである。ゾウでもネズミでも体重一

著者が小学生低学年のころ《死ぬ》という事実が、空恐ろしかった覚えがある。夜布団の中で「死ねば何もなくなる。自

が起きる、といった内容であった。カタストロフィー物語には興味をそそる記述はあっても、その場で忘れてしまうが、地球にとつての五、〇〇〇年がその惑星の一年になる、というイメージは鮮烈に残った。当時若手の生産者の何人かに、与太話として「もしその惑星に知的生物がいて、地球のわれわれを見たとき、われわれをどのような生物と見るのだろうか？ アリよりもみじめな生物に見えるのだろうかねー」等と話題を紹介したものであった。

たかが人間されど人間である。